



うろ衣

續編

下



けりもきりもはなす紙燭をて母を遊らひて母の業火を
しるをよこし車あつてかきかきとてはなす母の
と親よこし

火とてりにもぬぬいへて続れり

是其常律

浮葉のたのめりしつらに仕度なきをいふまて
侍れぬのまじりぬぬのまじりぬぬのまじりぬぬの
つらりて益とよて羅敷とよよ各城別今幸竹は松河
よよとて是より年々の便りぬぬ

はなすもなすもいふのまじりぬぬ

鶴續下ノ一

蟬汁

三伏の白きりのまじりぬぬ

蟬あつてはなすもいふのまじりぬぬ

はなすもいふのまじりぬぬ
はなすもいふのまじりぬぬ

死のまじりぬぬは林の蟬

賀其別装文

後父の白御の御潔清もすも林の風もいふ
さらし官路のあち中もいふもいふもいふもいふも
まじりぬぬと安んじていふもいふもいふもいふも

以先、同志の徒ありて、鶏黍の約をなすべしと誓ひ、
倒よるも鉢の末と、蚊をよたまて、もあやふく、
更ちつる、事紀行とんて、おんぬ、
また、末は二三條の白を降、
とて、
主人の遠遊、
いん、

拾り、移し、扇、
の、
の、

贈曉吾辭

曉吾、
は、
く、
つ、

梅、
の、

卷記 直曉吾書

緋、
僧侶、
も、
恒、
り、
女、
く、

かみ

ちり残る茶をいままありたのかい

山ト子向のまじりていゝあつらひのいふ

まじり田原村落の縁えまじりていゝあつらひのいふ

暫くあり

中をより田原のいふ

贈所訪不遇人文

安まらぬの国をいふまじりていゝあつらひのいふ
留まのすゑるまじりていゝあつらひのいふ
まじりていゝあつらひのいふ
まじりていゝあつらひのいふ

まじりていゝあつらひのいふ

まじりていゝあつらひのいふ

まじりていゝあつらひのいふ

まじりていゝあつらひのいふ

まじりていゝあつらひのいふ

まじりていゝあつらひのいふ

まじりていゝあつらひのいふ

まじりていゝあつらひのいふ

まじりていゝあつらひのいふ

らと繡車に 魚永田氏寄

日は残るあつらひのいふ

これハ其の人の作と云ふ或ハ山林はむらひの物と云ふ
以て之居は滄きも官士の上におていらはるるを
とめはいてや印を解さむと云けをやと世を逐鹿の
心も誘へし孟母の如く信を誓も此れなり水田氏
の居宅ハ榭梅とらとて金鑄きも軒は輝く朝日夕日
の海もかりとて人思ふやとらとて繡の帯と掲ぐ
をすると海もむらなり官路はまきまきの志わる眼は
常にこの世の事や作を世縁の事思ふと
しんく後回の忠情りに接むとて切なり
名も後とて子孫の長くは傳りてこの山林はゆ
らゆらとて婦生とて女もまらぬ人はいを何と
とてまらぬ人はいに記とむとてまらぬ人はいに記と

其書はゆらとて人伝傳をりて常とてまらぬ人はいに記と
ゆらとて常とてまらぬ人はいに記と

訪以文辞

以文字君にまらぬ人はいに記と
うけ梅梅まらの詠をうけて常國の折りとて
家語をまらぬ人はいに記と
らやの白いは行旅梅のやせむ今もに可まらぬ人はいに記と
めすれよ叶いてあはるの風流いらに可まらぬ人はいに記と
ゆらとて常とてまらぬ人はいに記と

生るまらぬ人はいに記と

嘯荅詩

絃と断劍とかけむうの後袖よきりてこころを
一つの好くは歎うれぬるあゝの梅軒の情荅子いさすは
こころを一朝くけ中枝の月よも待てて故りの露と借
ぬこころをこころをよも目よもこころを風のもよゆらぐは
よらつひよもよもよもよもよもよもよもよもよもよも
ていよんこころを誰うよもよもよもよもよもよもよも
藝能能は勝れ百事百成の意用のこころは蕉山の心と
慕ひこころはこころはこころはこころは又ハ夏中
百穀の口ぬらふをつらぬ月言風雲おあふるに魂を
なやまこころはい道の大惜せよこころは昔の誇りこ
ころは我をこころはこころはこころはこころはこころはこ
ころは

月の夜は雪の朝會其人あれて我をこころはこころは
うけて荅子たのこころはこころはこころはこころはこ
天象時々のこころはこころはこころはこころはこころは
こころはこころはこころはこころはこころはこころはこ
是ハ我をこころはこころはこころはこころはこころはこ
いよんこころはこころはこころはこころはこころはこ
なやまこころはこころはこころはこころはこころはこ
おあふるに魂をなやまこころはこころはこころはこ
よもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよも
なやまこころはこころはこころはこころはこころはこ
官よこころはこころはこころはこころはこころはこ
あやこころはこころはこころはこころはこころはこ

名残くはよや止むと海軒は昨日の雨をぬきぬき
 この山にたれあり雪の郭公と我をさるるまは四月よきと
 菅笠の蔭とひつひつと我をまはす一ちかり蔭をては
 今平作と取あはぬ辞よこしの毎もを後へ中よ
 世のわらわらひもわれはこころぬく歌うらまの
 つもそれハ我方の上とこ思ひしれ蒼子とさくらめ
 すとやうなれこころと後と我固とこ思ひさうさうわ
 こころ定めなぬと始めて思ひ合はぬとれはけり
 かくあ中さきまてよとあわも我にこころあり人もぬひ
 わらわらと若霊魂めきこころあは梁月のまゝのまゝと
 けし向の鼓推と定めよ傳伴それゑ士の雪ハ時あり
 消ぬけいね締こころとこころ期ありこころと

供花 そらむひけて魂まねうせむねすこ
 拜礼 社カミ奇シテは位袖もたふよ夜夢す

草風詠

中々の秋はけ武蔵のよありと唄蒼子う計まの魂をさり
 今手もかうし吾妻よ下りて祈るこころいふは毎日は
 草風子うけらるる便なきこころはこころや其み披る
 今よは余りたるも致るもや後とく思ひさうさうのこころ
 涙めまうとせねこころは夢なこころりこころいふは
 そらるるこころ袖はぬれぬめこころはこころいふは
 けりこころいふは後立りも定まらさうとこころいふは
 こころいふは其さうりこころのこころいふは

秋う枝のかしこもうらぐよめこけていそこのしうき
ちびも死ぬくもせんこれハ辞世のうたの思ひはせんよ
うううもむい骨折となわぬくちちちこちうう
いんいんいんあめゆーかきりりのちちよよいん
てろあぶん今いりよきこもかつてんくふんこれ
かきりりいじやうて一夜の他きけはんちん
むいんいん坊の今更よ目のこもいんいん
うんいんいん氣色なれいん又いんいんいん
いんいんいん別れいんなわたりいん我情を子う誅か
きりりいんいんいん袖をぬいりいんいんいんいん世よ不
いんいんいんいん人の終うるも有まきいんいんいんいん
まきいんいんいんいんいんいん又其人を打ねいん

鳥賣下ノナ

むいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
隣笛は揚と断て一うよよいんいんいんいんいんいん

誠はまきいんいんいんいんいんいんいんいん

悼崔此文

今年の秋はあきいんいん誰れは誓ひいんいんいんいん
月の晦りも橋井氏を崔身まかりぬいん短夜の短ういん
ううういんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
いんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
才の勝れいんいんいん只明書のためまじいんいんいん
めていんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
いんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん

けると思ふよめてこそ姑射山の字と描てうへいし
かゝじちゝゝ上の一字と置て射山とやいと下ろ
一字とあゝゝめて姑射とやいとむいつれとめい
失ろゝ二つと一つと定めむハわいの撰よあゝゝゝ
序よゝゝゝ

かゝゝ山ゝ名をくて呼子身

与某文

好て豪飲よ酔る人ありいたし思ひもゝゝ有らん忽
ハ仙の仲濡よ透れて今よりいゝ酔ゝと固く折
ゝゝ行末の乱我をゝゝゝめゝゝ右よ守
つゝ語を書て得てせゝゝ語あゝゝ下戸なり

酔て面白やん止てよやん其や開ゝゝれ
其責のいと切なれゝゝゝゝてすろなゝゝと
あゝゝ

神もろけよ酒ととせり滞後

一を為画賛

け四々誰とゝせゝゝん志ひて名とつけと
容顔ゝゝゝゝ蘭花よ鬢髻ゝゝりこれ例の
菊はゝゝゝ鳴呼我をよちれり東籬すよ
白ゝゝと五株の柳もあゝゝりなゝゝは
冬々剛明ゝゝいふゝゝ

菊ゝりゝゝゝゝところや霜の初

定茶名文

茶味わくくは製して名をいひて定めむと我よくは
とりあくと雑の一向を茶もいひて

茶の下をわく片白の粒うふ

これとてまくとはいふや

醉雀亭記

くは呉竹の芝居く酒味ありくは臨印よりけ
むくいのわいふ店より似くくはわくく又六の粒茶
常盤の文治く確のこくぬる茶をさくめくは
土蔵の白壁雪と奪ふ其わくく又風雅よりくは
強人よりくはくはくはくはくはくはくはくは

しいーハつり行くの多き来たくも毎日杖は百歩をくけて
次金買のものをくくそ二季の情と強くせすたのめくは
得まわくくめくれは後着より名はあつ海野屋の肌を
付あれくは一室は痛くく号わくくむくくをくく求む
卒尔は醉雀の二字とよふ其といふに同あより乃
静翁の求むと眩金毫を解て價をわくくたをくく
あまは仙雀と日百杯は酔くめめめめめめめめめめ
持合せの千年の齒と酒ゆきくくくく合点やと
且強れ且強くくわくく為くく謾りく老と掃く

極千居記

居所より号を定てく後人わり其入りくく名を楓取と

よふ枕を紅雲とて夜の綿よりうらむるもや實とれ綿と
 こそ夜行のこゝろ富貴のこゝろ人よあわれめとて
 辞とてこれと其業と伴ひ長き世をせ辞のわろ人あり
 こそ白雲の面とてけり是はくろくのわらまひとてこれ
 才よ徳あり家あるまゝいとくろくもせり
 ゆのつゝくれかゝるゝとて綿をて細とてよす
 ともうゝこゝろとてあつた物と我は只其夜の綿とて床
 一とれ物必を^{ケヤク}ぬる長久の寝むとてやこれハ夜の
 枕のぬりるも世とて移して千秋の二字は定めぬ
 すも其唱古くしてめつゝとて世字と上下とて
 うらむもよふかゝるゝとてあつた物とて綿とてよす
 秋千名の二字と影とてけいの求よとてとて

琵琶園社中撰集書目

尾張名古屋 東壁書房 水樂屋東四郎

唯芝集

此書を朱樹翁東方紀行の集たるを諸國にて刊板せしむ
 いろふあつたも全部五冊とす

春鶯囀

全一冊 梅蔵人

天志著

全一冊

法々華經

全一冊 三日月集

白圖撰
 少汝補

全一冊

麻刈

全一冊 秋風餘情

椿堂撰

全一冊

鳶乃眼

全一冊 人來鳥

青川撰

全一冊

むし合

全一冊 玉垣集

孔阜撰

全一冊

續赫夜姫

全一冊 草枕

素磔撰

全一冊

瓢日記

全一冊 松の炭

蕉雨撰

全一冊

橋日記 卓池撰

全一冊

庵の犬

野雀
五道
大藤

同輯

全二冊

とつとつ衣

也有老人述
狂文和歌教白とわらひ

全三冊

同後編 同上

全三冊

狂歌蓬々嶋

三蔵樓大人撰
春興狂詠

全二冊

狂歌頭の絲

同上

全一冊

狂歌初日集

同右
狂歌初日合の
九思をあらひ

全二冊

狂歌千歳集

同上
狂歌千歳集
狂歌千歳集

全二冊

狂歌初心抄二冊

唐衣橋御大人著
狂歌の心得多き
多きをあらひ

狂歌才蔵集

四季酒寄彩撰
狂歌の字多し
狂歌の字多し

全二冊

俳諧歳時記

著作堂先生撰
全部二冊

同諸集訂誤

布碩翁著

全一冊

同夏たのしみ

也有翁著

同諸集訂誤

布碩翁著

全一冊

志みのすゝ物語

宿屋飯盛大人著
全部二冊出来

此書ハ當世に於て
狂歌のうらやまを
尤興あるをあらひ

狂歌ハ字治拾遺物語の種文より
後入とす
拙学俳文拾遺物語の種文より
後入とす

